

辻精磁社（つじせいじしゃ）

辻精磁社は辻家が営む窯元で、17 世紀より磁器を生産してきた。窯元の建物は先祖代々一族が住んできた家であり、1863 年に建てられ、有田町の重要伝統的建造物群保存地区の一部となっている。敷地内へと通じる門の右側にある木の厚板には、350 年以上にわたって担ってきた宮内庁御用達の文字が書かれている。

門の戸枠にも時の流れを見て取ることができる。建物の前にある通りはかつて、この辻家の敷地で行き止まりになっていた。馬車はこの門の内側の少し広がっている場所で U ターンをしなければならなかった。門の左下には、馬車が旋回時にこすってできた傷を今でも見ることができる。今も、いくつかの通りは道幅が非常に狭いため、この地区に住む人たちは少し離れた所にある共有地に車を止めなければならない。

染付（そめつけ）で装飾された辻家の白磁は、その薄さと、花や鳥などの縁起物をあしらった見事なデザインで有名である。宮内庁に納める注文品は壊れやすいうえ、完璧な品質でなければならないことから、特に難しい仕事である。そのような丹精込めて作った作品が最後の焼成工程の際に灰や煙で駄目になってしまわないよう、辻家の八代目は極真焼（ごくしんやき）と呼ばれる独自の方法を考案した。焼き上げる器を、器と同質のまだ焼き上げていない土で作った匣鉢のような入れ物に入れ、2 つを一緒に焼き上げることで外側の入れ物が内側の器を守ってくれるのである。昔から窯元は薪を燃料にしてきたが、現在はガス窯や電気窯を使い、工程をコンピューター化して生産を簡略化している窯元がほとんどである。しかし、辻精磁社では何度も修理を繰り返しながら 50 年以上にわたってガス窯を使い続けている。どの作品も完璧に仕上げなければならないため、湿度や空気の質などの条件に合わせる事が辻精磁社の生産工程で重要な要素となっている。そのため、新しい窯に切り替えることになった場合は、現在の窯で 50 年以上にわたって築き上げてきた完璧な焼成を確実に行える技術を習得し直さなければならないことになる。

辻家は、明治（めいじ）時代（1868～1912）まで有田焼磁器の唯一の宮内庁御用達窯元であった。最終的には、辻家だけで引き受けるにはあまりにも量が多くなったため、作業量を分担する目的で他の窯元も御用達に任命されることになった。例えば、香蘭社（こうらんしゃ）は、創設してすぐに宮内庁御用達となっている。その創設者の中には、八代深川栄左衛門（ふかがわえいざえもん）（1832～1889）や、辻家十一代当主で栄左衛門の義理の弟である辻勝蔵（つじかつぞう）（1847～1929）などの有田焼の名工がいる。